千刈狸の呟き

～ 義実家あるある（２）―風習― ～

嫁　　狸

結婚とは異文化交流である。実家しか知らない状態から、他所の家で生活するようになるのであるから、カルチャーショックは多かれ少なかれあるものと思う。嫁狸が気づいた秋田の義実家あるあるを挙げてみる。

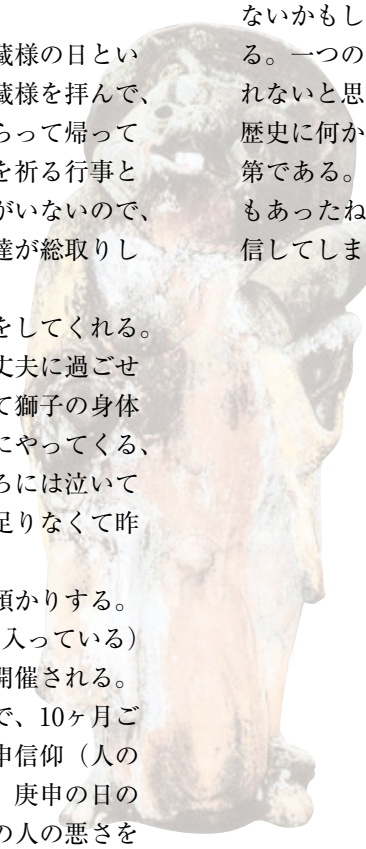
正月。三が日は餅と簡単なおせち料理で、主婦も休みを取るものだと思っていたが、義実家の元日朝はとろろ飯で始まる。大みそかにご馳走を食べるので、胃腸を休めるためとのこと。元日の夕方は、またご馳走が出てくる。なるほどと思って美味しくいただく反面、元日からすり鉢でとろろをする義母狸に頭が下がる。

三月。七段飾りのひな人形を飾る。代々受け継がれた土人形や、40年以上前から捨てられないぬいぐるみ達も一緒に出てきて飾る。虫干しのようなものだろうか。昔は地域の子供達が家々を回り、ひな人形を見てお菓子をいただいていたようだ。日本版ハロウィンといったところか。しかし、今は地域に子供がいない。ちなみに大人もあまりいない。それでも、ひな人形の横には今年もお菓子と飲み物が常備される。

七月。正式名称はわからないが、地蔵様の日というのがある。子供も大人も町内のお地蔵様を拝んで、お菓子をお供えして、別のお菓子をもらって帰ってくる。おそらく地域の子供たちの成長を祈る行事と思われる。当町内には我が家以外子供がいないので、近年お地蔵様のご利益は我が家の子狸達が総取りしている。

九月。獅子頭が町内を回って厄払いをしてくれる。よくある「獅子に噛んでもらうと一年丈夫に過ごせる」というアレである。獅子舞と違って獅子の身体はなく、獅子頭だけが太鼓と鐘と一緒にやってくる、やや地味な一行だ。子狸達が小さいころには泣いて嫌がる微笑ましい行事だったが、人が足りなくて昨年頃から開催されていない。

庚申様。庚申の神様を持ち回りでお預かりする。60日ごとの庚申の日に、庚申さま（箱に入っている）次の家に移動し、精進料理で飲み会が開催される。我が家含め５軒でお預かりしているので、10ヶ月ごとに義実家は飲み会の会場となる。庚申信仰（人の腹の中には３匹の虫が住みついていて、庚申の日の夜には、人が寝ている隙に虫達が、その人の悪さを天帝に言いつけに行く。それを防ぐため、寝ずに朝まで宴をして過ごす。）に基づいた風習であろう。しかし、メンバーは飲み潰れて帰っていくので、言いつけられることが増えているだけのような気がする。さらに、飲み過ぎて怪我人が出たり、高齢化で参加できない家があったり、葬儀などの不幸があって参加できない家が続いたりした結果、もはや開催されなくなった。

五人組。町内の仕事があるとき、義実家は「五の組」という組に所属して動いている。一番端から並んだ５軒が五の組なので、組み分けに特に疑問を持っていなかったが、なんと江戸時代の「五人組制度」から続くものであるという。江戸時代、農民が年貢を納めたりするときに連帯責任を負わされた制度として、教科書に載っていたアレである。知った時には、江戸時代からの時間の波にのまれて、しばし呆然としてしまった。

地域の風習はどんどんなくなっているし、あと20～30年後に残っている五人組は、義実家だけかもしれない。五人組どころか、町内で残る家はほとんどないかもしれない。限界集落、これも義実家あるある。一つの集落の終焉までの経過を見ているかもしれないと思うと、再び時間の波にのまれて呆然とし、歴史に何か残さねばと千刈狸の紙面をお借りした次第である。今回の原稿を読み返して、「そんなこともあったねぇ。」と過去形で話す日が来ることを確信してしまっている嫁狸なのだ。